

# 地図はどこへ消えた？

今、本屋にいくと「チーズはどこへ消えた？」という本が、ベストセラーコーナーに並んでいる。そして、柳の下のドジョウをねらう「ドジョウ本」も多い。特に装丁から、タイトルのまでそっくりの「バターはどこへ溶けた」は、出版差し止め訴訟にまで発展している。

だが、ここで紹介するのは、題名すらほとんど同じパロディー話、「地図はどこへ消えた？」である。是非、「チーズはどこへ消えた？」を読んでから読まれることを進めます（買うほどの本じゃないけど）

昔ある遠い国に、3人の小人が住んでいた。彼らはいつも森で地図を探し回っていた。オリエンテーリングをするためと、幸せになるため。3人は、ティア、エン、オリという名前。

小人たちは、毎日自分たちの特別な地図をみつけようと、長いこと森を探し回った。その森はいくつもの湖と丘からなる迷宮のような森で、どこかにすてきな地図があった。しかし、崖や湿地もあって、すぐに道に迷ってしまいかねない。それでも、森にはオリエンテーリングができる正確な地図が隠されていて、そこにたどりつくことができれば地図が手に入るのだ。

ある日、3人は、地図ステーションCの湖の端で、好みの地図を発見した。それから3人は毎朝、地図ステーションCに向かった。来る日も来る日も彼らは地図ステーションCの周りでオリエンテーリングをした。あまりに長くオリエンテーリングをしたので、その周りの地形も全て覚えてしまった。地図なんかなくても、オリエンテーリングができるほどだった。それでも彼らは、習慣のように地図を手にしてオリエンテーリングを続けた。

地図がどこから来るのか、誰が置いていくかは分からなかった。ただ、そこにあるのが当然のことになっていた。3人は、そこにあった岩に格言を書いた

「地図を手に入れば幸せになれる」

ところがある朝行ってみると、地図がなくなっていた。3人には青天のへきれきだった。「なんてことだ地図がないじゃないか」「地図がなくちゃオリエンテーリングができない」「地図はどこへ消えた？」

エンはいった「でかけよう」。オリとティアは聞いた「地図なしでかい？道に迷ったりバカなまねをするのを面白いことはないんじゃないか？」だが、エンは言った。「何このあたりの森はもうすっかり分かっているさ」

だが、地図を持たずに森に地図を探しにでかけたエンは、森の奥深くに迷って、帰ってこなかった。

地図を持たずに森に入ることに反対したオリは、地図ステーションCのかたわらに落ちていた地図を発見し、その地図を持って自分も地図を探しに出かけることにした。

だが、オリは、地図の見方を忘れていた。地図さえ手にしていれば、目的地にたどりつける。そう思っていたオリは、持っているだけで地図を見なかったのも、やはり森の奥深くで迷って、帰ってこなかった。

ティアもやはり地図ステーションCのそばで1枚の古ぼけた地図を見つけた。その地図はとところどころ破れたり、インクがにじんでいて、よく読めなかった。

ティアは、その地図を読みながら慎重に進んだ。迷ってしまうんじゃないかという恐怖はあったが、その

恐怖を乗り越えると予想以上に楽しくなるのがわかる。事態がいっそうよくなるように、ティアはもう一度心の中でイメージした。フジからセコツジまで。自分の好きなあらゆる地図の山に囲まれた自分の姿を、細かいところまで思い描いたのだ。好きな地図をあれこれつかっているところも想像して、楽しんだ。

インクがにじんだり、破れたりした部分が近づくと、ティアはすかさずそれに気づくと慎重に進んだ。彼は自分が正しい方向に進んでいることを願うばかりだった。ティアは、考えたことを岩に書き付けた。

「早い時期に小さな違和感に気づけば、やがて訪れる大きな違和感にうまく適応できる」

永遠に森を走り回らなければならぬのかと思った時、突然それは起こった。これまで通ったことのない丘の上を走っている時、突然地図ステーションNと地図を発見したのだ。随分遠くまで来たものだ、ティアはそう思った。だが、安心しきっていると簡単に事態が悪化することも分かっている。毎日地図ステーションNのまわりを点検し、地図の状態を確認した。予期せぬ変化に驚くことがないように。

「地図とともに前進し、それを楽しもう！」

